

Project

「言語の働き」と「ICT機器」で 深化するProjectの言語活動



・奥住 桂
（埼玉大学）

内容解説資料は
こちらから
ご覧いただけます



「言語の働き」がProjectをおもしろくする

NEW CROWNには、各Lessonで学習した表現を用いて発展的な言語活動に取り組むGoal Activityのほかに、**既習の言語材料を活用して領域統合的な活動に取り組むProject**のページが、各学年に3回ずつ設定されている。このProjectは、直近に学習した表現だけでなく、これまでに学習した知識や技能を総動員して取り組む「思考・判断・表現」の指導と評価にぴったりのページになっている。

とはいえ、こういったページはこれまでも存在したし、教科書を使用しなくても同様の活動を授業に取り入れてきた先生がたは多いだろう。そこで本稿では、この07NCのProjectがどのような点で新しくなったのか、そして先生がたが教室でこれらのページを扱う上でどんな工夫ができるのかについて考えてみる。キーワードは、「**言語の働き**」と「**ICT機器**」である。

現行の学習指導要領の「2 内容」の中の「(3) 言語活動及び言語の働きに関する事項」には、言語活動を行う際には「言語の使用場面」だけでなく「言語の働き」を取り上げるようにする、とある。具体的には「礼を言う」「苦情を言う」といった「気持ちを伝える」働きや、「申し出る」「反対する」といった「考えや意図を伝える」働きなどが列挙されている。

中学校学習指導要領（平成29年告示）外国語「イ 言語の働きの例」

(ア) コミュニケーションを円滑にする	・話し掛ける ・聞き直す	・相づちを打つ ・繰り返す など
(イ) 気持ちを伝える	・礼を言う ・褒める ・歓迎する など	・苦情を言う ・謝る
(ウ) 事実・情報を伝える	・説明する ・発表する	・報告する ・描写する など
(エ) 考えや意図を伝える	・申し出る ・意見を言う ・反対する ・断る	・約束する ・賛成する ・承諾する ・仮定する など
(オ) 相手の行動を促す	・質問する ・招待する	・依頼する ・命令する など

こういった「言語の働き」は、当然ながら相手がいるコミュニケーションの中で機能するものだ。例えば「反対する」という行為をするためには、誰かが主張している意見などに反対意見を述べるということな

ので、そのためには相手が何を言っているのかを理解し、その反論として適切な内容を考え、相手に伝わるような表現や言い方を考える、といったコミュニケーションの相手を意識した「思考・判断・表現」が求められる。

07NCのProjectを1つ紹介しよう。2年Project 2「人気のあるもの調査」は、「海外から日本に修学旅行に来る学校の生徒のために、日本のおすすめの食べ物をランキングにして紹介する」という設定になっている。この活動では、アンケートを取るために「質問する」、結果をまとめて「報告する」、グラフなどを「描写する」といったさまざまな「言語の働き」を駆使して活動に取り組む必要がある。



このように、目的がしっかりしている言語活動では、複数の「言語の働き」が自然と引き出される。例えば誰かにかかを「報告する」際には、「I'm going to talk about」と「話を切り出す」ための未来を表す表現や、「Look at this chart.」と「相手の行動を促す」ための命令文など、複数の文法事項や「言語の働き」を組み合わせることで表現することが求められる。このように複数の「言語の働き」を織り込んだ言語活動にすることで、これまで学習してきた内容を目的や場面別に再整理する機会にもなるだろう。

07NCのProjectでは、こういった「言語の働き」が生きる活動が**たくさん設定されている**。1年Project 2「理想のロボット選手権」は、当然ロボットの特徴や機能を「描写する」ことが中心になるが、そこに「提案する」という要素が加わることで、生徒の言語使用がより複合的で多彩なものになるように工夫されている。

一方で、2年Project 1「スピーチ『My Dream』」のように、シンプルな活動もある。こういったスピーチは定番の活動だが、同様の活動を小学校でも経験している可能性もある。そこで、この活動をより魅力的にアレンジするために、先生がたで別の「言語の働き」をトッピングしてみてもどうだろうか。

例えば、この「My Dream」というスピーチに「説得する」という

働きを加えたらどうなるだろうか。誰かを説得するために自分の夢を語るというと、「クラウドファンディングの提案」などの場面が思い浮かぶ。それぞれの提案を聞いた人が、どの提案に出資するかを選ぶといった活動にすると、聞き手にもより緊張感が出るし、話し手も相手に納得してもらえるように「何を」「どう」伝えるかという工夫をするようになる。これこそ「思考・判断・表現」のねらうところだろう。

「言語の働き」を強化するICT機器の働き

新しいNEW CROWNのProjectのもう一つの特徴は、ICT機器の活用を促す活動デザインになっていることだ。例えば、3年Project 2「ラジオの30秒CM」では「CMを録音しよう」というステップが示されているが、これはタブレット端末等が配備された現代の教室だからこそ提案できる活動だと言える。

授業におけるICT活用というと、最新のアプリやネットサービスなどを最大限に活用した華々しい活動事例を目にすることもあるが、**実は一番役立つのはタブレット端末等に最初からついている基本的な機能**である。例えば、「録音」「動画撮影」「写真撮影」「お絵かき」「タイマー」などの機能は、どんな端末にも標準的に備わっていると思う。この「地味な機能」をうまく組み合わせることで、Projectの活動はより深い思考を学習者に促すようになる。

先述の「ラジオの30秒CM」で言えば、自分の声を録音して聞くだけで、生徒は「これじゃ駄目だ」と何度も録音し直すようになる。30秒という時間制限があるので30秒に収まらなければもちろん、聞き取りにくいところがあったり、もっと強調して伝えたいことがあったりすると、生徒は「もう一回!」と挑戦を続ける。このようにICT機器の「地味な機能」のよいところは、生徒が自分のパフォーマンスを客観的に見る(聞く)ことができる点にあるが、それによって「伝える」「宣伝する」といった「言語の働き」が可視化され、生徒たちがその働きを体感できるという点も大きいだろう。

2年Project 3「好きなもの×観光マップ」や、3年Project 1「旅行プランの提案」などの発表型の言語活動では、画像を貼りつけて簡単に綺麗なデザインの制作物を作れるのも魅力的だ。こういった制作系の活動では、これまでだったら生徒自ら絵を描いたりしていたが、そこに時間がかかりすぎるといった難点もあった。ICT機器の活用により、短時間で、簡単に、しかもよりリアルな制作物が作れるようになることで、生徒も教師も英語学習のほうに時間とエネルギーを注げるようになるはずだ。

また、コミュニケーションの手段として、言語以外の視覚的要素も大きな役割を果たす。ポスターやちらしを作成する上で、このような「見せ方」を考えさせることで、文字として載せる英文はどんな内容、量、表現であるべきかを主体的に考えるはずである。これも、**ICT機器が「言語の働き」を強化する一例**といえる。

新しくなったNEW CROWNのProjectを紹介してきたが、紙面の通りそのままやってみてもよいし、「言語の働き」や「ICT機器」を「ちょい足し」してみるのもおもしろいだろう。いずれにしても、目の前の生徒たちがより主体的に英語を使用する機会になるように、このProjectを最大限に活用していただければと思う。そして、具体的な活用事例や「ちょい足し」のアイデア等を、今後先生がたと共有していけたら、さらに楽しい英語授業が全国に広がっていくのではないかと期待している。

Writing about Science

Writing about STEM topics (science, technology, engineering, and mathematics) is a special skill – especially for writers not from STEM disciplines. **All three books have at least one STEM topic**, and each was a challenge to write.

We needed topics that connected with the lives of our students and that interested them. We needed topics with feelings and characters our students could relate to. And we needed to explain the matter clearly and accurately for our readers. Bringing all these together while writing about emergency planning, water recovery, and design and technology was a challenge. Getting it right required many discussions and revisions and finally checking with expert articles in the field.

In the future, I hope we can find and include more STEM topics that engage students and connect with their lives and interests. If you know of any, please contact us. We are always open to suggestions.



Thomas Hardy
(元 慶應義塾大学)

NEW CROWNとわたし